

ガラテヤ人への手紙をお開き下さい。今日から新しくこのガラテヤ人への手紙を学んでまいります。いつものようにまずは序論というものから、本でいうところの端書きなるものを皆さんにお伝えしていきたいと思えます。ガラテヤ人とありますけれども、このガラテヤ人というのは2000年前のちょうどパウロがこの手紙を書いた時代はローマ帝国の属州でありました。地域で言うと現在のトルコに当たります。ガラテヤという町があったのではありません。これはあくまで属州という広大な地域を指します。皆さんの聖書の巻末の地図を見て頂くと、そのガラテヤ地方を見て取れますので、馴染みのない方は是非地図を見てガラテヤとは一体どういうところなのか、どの程度の地域を指すのか把握して頂きたいと思えます。事実このガラテヤ人への手紙の1章2節のところには『ガラテヤの諸教会へ』とあります。ですからガラテヤという町の1つの教会にこの手紙が宛てられたのではなく、ガラテヤ地方のいろいろな町に既に建っていた教会にこの手紙が宛てられて、勿論これは回覧板のようにして回されたというものであります。実際に後でどのような地域なのか地名も言って、そしてまた後ほど地図で確認もして頂きたいと思えます。このガラテヤという地名の意味ですけれども、これは“ガウ”、若しくは“ガリアの地”という意味があります。“ガリア”と言うとこれはフランスを指します。ユリウス・カエサルが『ガリア戦記』というのを書いていますが、それはフランスの“ガリア”地方での戦争の記録を指すわけです。そこに住んでいた人たちは、ケルト人という人たちです。ハロウィンなどのお祭りの起源が、実際にこのケルト人のお祭りにあるというふうにも皆さんにはお話したことがあります。そのケルト人の住むガリア地方から、つまり現在のフランスからずっと下ってきて、ヨーロッパの方からずっと南下してきて今のトルコの地、そこに彼らが定着したので、その地はガリア人の地、すなわちガラテヤの地というふうになったわけです。そのような経緯があるということ覚えて下さい。ちょうどBC270年頃からそのガリア地方から、今のフランスからガリア人たちが下って来た、移住して来たということです。ユリウス・カエサルという人はこのガラテヤ人のことをこのように述べています。『彼らはすぐに心変わりする人たちである。よって彼らを信用してはならない。』この人たちはコロコロ態度を変える。すぐに気が変わる。そういう人は勿論信用なりません。でも、そのユリウス・カエサルが言う通りに確かにガラテヤ人はすぐに心変わりがする、すぐに態度を翻す。コロコロ変わる人たちだったということは、パウロの宣教を見ても分かります。この手紙を見ても分かります。例えば1章6節に『私は、キリストの恵みをもってあなたがたを召してくださったその方を、あなたがたがそんなにも急に見捨てて、ほかの福音に移って行くのに驚いています。』急に態度を変える。急に心を変える。急にコロコロと掌<sup>てのひら</sup>を返すように。信用ならない人たちである。そういう人たちに対してパウロは宣教したということ覚えて下さい。実にそれは困難極まりないものだったということも知って頂きたいと思えます。使徒の働き14章というところに、パウロのガラテヤ宣教の記事があります。実際にそこに出てくる町がガラテヤ地方の町であるということ覚えて下さい。イコニウムとか、ルステラが出てきます。それらはすべてガラテヤ地方の町です。そこにパウロとバルナバが宣教に訪れたわけですが、生まれながらに足の効かない下半身不自由な人が、病人がいて、その人をパウロが癒すわけです。イエス・キリストの御名によって、どんな高名な医者でも当時の最新の医学をもってしても癒すことの出来なかったこの重病人を、パウロがイエスの名によって癒してしまっただけで、群衆は驚いたわけですが、そしてパウロと一緒にいたリーダー格のバルナバのことをギリシャの主神のゼウスだと。そしてパウロのことをヘルメスだと。この人たちは神である。神が人の姿をとってやって来たんだと。この2人を祀り上げて、この2人を神として礼拝まで捧げようとしたわけですが、勿論そのような事態に対して、パウロは困惑しただけではなくて、彼らを制して、そして使徒の働き14:19のところを見て頂きたいと思えます。『ところが、アンテオケとイコニウムからユダヤ人たちが来て、群衆を抱き込み(この群衆というのは先ほどパウロが見せたその奇跡を驚き、感動し、そしてパウロはまさに現人神であると。そのように褒め称えた人たち。その群衆たちが、すなわちガラテヤ人が)、パウロを石打ちにし(してしまったわけですが)、死んだものと思っただけで、町の外に引きずり出した。』と。20節のところでは『しかし、弟子たちがパウロを取り囲んでいると、彼は立ち上がって町にはいって行った。その翌日、彼はバルナバ

とともにデルベに向かった。』このデルベもガラテヤの町です。その日の例えば午前中にパウロのことを神様だと言っていたと思ったら、もうその日の夕方にはパウロを石打ちにして殺してしまう。すぐに心変わりする。信用ならない人たちである。それがガラテヤ人です。そんな人たちに福音を宣べ伝えるというのは、困難極まりないものだとこのことを知って下さい。命が文字通り懸かるものだとこのことを知って頂きたいと思います。パウロの第一回伝道旅行、それが今読んだ**14章**のところまで終わるのですが、その直後にこの手紙が書かれたわけです。ガラテヤの教会に偽教師たちがやってきて、聖書に書かれていないようなことを教えるようになった。「イエス・キリストを信じるだけでは不十分である。イエス・キリストを信じることをプラス〇〇。」それは全て異端、カルトの特徴です。「イエス・キリストを信じるだけでは不十分です。私たちの聖書研究会に出席して、そこで勉強しなければなりません。」とか。「イエス・キリストを信じるだけでは不十分です。聖書だけでは不十分です。モルモン書も学ばなければ。そして聖なる下着を身につけて、洗礼を受けなければ救われません。」とか。それは勿論モルモン教のことです。正統派のプロテスタントの教会の中にも「イエス・キリストを信じるだけでは救われない。イエス・キリストを信じることとバプテスマを受けることなしに人は救われない。洗礼を受けなければ救われない。」これも異端です。これもカルトです。しかし残念ながら今日多くの教会で、伝統的な主流派と呼ばれる教会では「洗礼を受けなければ人は救われない。クリスチャンになれない。」と実際に教えています。それは明らかに聖書に反する教えです。そしてそのような聖書に反する教えがもうすでに**2000年前**、パウロが宣教し開拓し、心血を注いで生み出したこのガラテヤの諸教会においても見られる同様の問題であったわけです。既に偽教師たち、具体的に彼らのことは**“割礼派”**と呼ばれています。**2章12節**にそのような言葉を見ることが出来ます。または**“反対者たち”**という言葉も度々出てきます。反対者とか割礼派と呼ばれる偽教師たち、彼らは律法主義者であります。厳密に言うならば、ユダヤ教主義者と云った方がいいかもしれません。「イエス・キリストを信じるだけでは救われない。割礼も受けなければ救われない。」割礼というのは勿論皆さんもご存じのように男性の性器の包皮を切り取るということです。小学生にも分かるように言うならば「おちんちんの先の皮を切る」ということです。それを受けなければ救われない。これは律法主義です。これはユダヤ教主義です。福音は良い知らせです。誰でもイエス・キリストを信じる者は無条件で救われます。それは恵みというものです。恵みは行いの反対語ですから、救いには行いは一切含まれないのです。こうしなければ救われない、ということはありません。ただ、強いて言うならば、かつて群衆たちがイエスに質問しました。「**私たちが神のわざを行う。**」これは、救われるためには何をしたらいいですかという質問です。その神のわざという言葉を使う時、彼らは複数形を使いました。いろんなことをしなければ、いろんなわざ・わざ、いろんな働き、いろんな行いをしなければ救われないのではないかと、群衆は考えていたわけです。しかしイエスはそれに対してたったひとつのわざだけを示しました。たったひとつの行いだけ。それはイエス・キリストを信じることです。それ以外には必要ないとイエスは明言されました。ですから、強いて言えば信じることだけが私たちに問われます。信じるということは端的に言えば信頼することです。依頼することです。頼るということです。自分の行いに頼らずにイエス・キリストに頼ること。それがイエスを信じるということです。それが恵みによって救われるということです。**エペソ2章**のところにも「**私たちは恵みによって救われる。**」とあります。厳密には「**恵みによって**」と訳されるのですが、新改訳聖書では「**恵みのゆえに信仰によって救われる。**」と書いてありますが、厳密には「**恵みによって信仰を通して救われる。**」私たちは恵みによって救われているのです。それを信じる者は、義と認められる。神学用語でそれを「**信仰義認**」と言います。ジャスティフィケーション”justification”と英語で言います。それがこの**ガラテヤ人への手紙**のテーマでもあります。信仰義認、恵みによる信仰を通しての救い。それを脅かす動きが、生まれだてのガラテヤ地方の教会に見られるようになりましたので、パウロはその動きを牽制するべく、またそのような教えに警告を与え、注意を与え、すぐに心変わりをしてしまう、すぐにコロコロ態度を翻す、そういう気ままなガラテヤ人たちにこの手紙を釘を刺すようにして送ったわけです。この手紙はパウロが書いた最初期の手紙でもあります。先ほども触れましたように第1回宣教旅行の直後にこの手紙を書いたと言いました。それはちょうど**使徒の働き14章**で終わっているのですが、**使徒の働き15章**ではエルサレム会議という初代教会において最初の教会会議が開かれました。そこでのテーマは『**律法vs恵み**』です。割礼を受けなければ

ば人は救われないのではないかというユダヤ教主義者たちが台頭してきたわけです。その非聖書的、異端的な教えによって既に諸教会たちは大分困惑していたわけです。当時はユダヤ人クリスチャンが教会の多くを占めて、リーダーシップもユダヤ人クリスチャンたちによってとられていたので、行いによる救い、律法主義による救い、行為義認とも言います。そうした教えに異邦人クリスチャンたちは大変困っていたわけです。パウロが説いた福音というのは、行いによる救いではない。恵みによる救いである。ただ信じるだけで義と認められる。シンプルなものだったわけです。ところが、後からこのユダヤ教主義者の偽教師たちがやってきて「救いはそんなシンプルなものではないんだ。信じるだけではなくて、信じることでプラス割礼も受けなければ救われない。あれもしなければ救われない。これもしなければ救われない。」と。そのような論争に対して決着をつけるべく、このエルサレム会議が開かれたわけです。それが**使徒の働き 15 章**に記録されています。実際にそこではイエスの義理の弟であるヤコブがエルサレム教会の重鎮となっていました。ペテロとヨハネとヤコブと言ったら、エルサレム教会の、初代教会の三本柱だったわけです。そのヤコブが最後にケリをつけたわけです。『**律法 vs 恵み**』の論争に対して、私たちは恵みの中に留まるべきである。ただしユダヤ人の兄弟たちにも配慮すべきであるということで、非常に賢明な判断が下されたわけです。馴染みのない方は後で**使徒の働き 15 章**も読んでみて下さい。そのエルサレム会議の直前に、この手紙が書き送られたということです。年代で言うと恐らくは AD49 年頃と言われています。ですからパウロが書いた手紙の中では最初期のものだということです。内容としてもパウロらしい手紙となっています。パウロらしい手紙と言われてもピンとこないかもしれません。パウロの性格がどんなものか、彼の手紙をある程度読めば分かってくると思います。後でパウロの性格の部分もこの**ガラテヤ人への手紙**の中には色濃く出ていますので、指摘をしていきたいと思います。ただ、今は**ガラテヤ 6 章 11 節**を見て頂きたいと思います。『**ご覧のとおり、私は今こんなに大きな字で、自分のこの手であなたがたに書いています。**』この**ガラテヤ人への手紙**はパウロの自筆によるものだとあります。「それはそうでしょう。パウロが書いた手紙ですから、当たり前ではないですか。」と皆さん思うかもしれませんが、しかし実際のところパウロの書簡と呼ばれるもののほとんどはパウロが自筆したものではありません。それは筆記者が、パウロの言ったことをそのまま口述筆記したものとなっています。パウロがなぜ自分の手で書かなかったかと言うと、彼は病気で視力が弱かったので、また体力もなかったので、中々自分で手紙を書くということは出来なかったわけです。『**こんなに大きな字で**』というのは、小さな字が書けなかったのです。視力が病気によってほとんど無いに等しかったと思われます。ですから、何とかこの手紙だけは自分の手で書きたい。パウロの気持ち、ハートが込められている手紙です。物凄く時間がかかったと思います。ゆっくり、ゆっくり、一文字、一文字、心を込めながら、思いを込めながら、ガラテヤ人たちのことを、諸教会の兄弟姉妹のことを覚え、祈りながらこの手紙を書いたと思われる。ですから、非常に感情も込められています。その辺も後で文体を見て分かりますから、皆さんにお伝えしていきたいと思います。すぐに外部の影響を受けてしまう。すぐに偽教師たちの教えになびいてしまう。そんな人からすぐに影響を受けてしまうガラテヤ人たち。そんな彼らのことも自分自身に重ねながら、私たちは一体どうだろうか。あの人があんなことを言っていた。あの先生があんなことを言っていた。あの本にはこんなことが書いてあったとか。ピンポンしてきて「一緒に聖書を学びませんか。」と言う人が渡してきたその小冊子にはこう書いてあったとか。気を付けて頂きたいと思います。世界で話題になっている。聖霊の器。有名な伝道者の教え。かつてリバイバルを引き起こしているいろんな人たちの教え。ムーブメントのその教え。そうしたことにも是非注意をして頂いて、私たちはしっかりと福音に立って吟味をして、揺り動かされることのないように、振り回されることのないように。それは恵みの教えだろうか。それとも行いを求める教えだろうか。信仰義認か、行為義認か。律法か、恵みか。しっかりと吟味をして、そしてパウロの手紙を通して教えられていきたいと思います。最もパウロらしい手紙であるそのもう一つの理由は、そこにはパウロが一番強調したかった信仰義認の神学的な教えです。パウロ神学の最も明快にされているこの信仰義認の教えがテーマとなっているということでもあります。主題聖句というのが**ガラテヤ 2:16**になります。パウロ神学の最も明快に示されている信仰義認の教えがここにまとめられています。『**しかし、人は律法の行ないによっては義と認められず、ただキリスト・イエスを信じる信仰によって義と認められる、ということを知ったからこそ、私たちもキリスト・イエスを信じたのです。**』

これは、律法の行ないによってではなく、キリストを信じる信仰によって義と認められるためです。なぜなら、律法の行ないによって義と認められる者は、ひとりもないからです。』イエス・キリストを信じることプラス割礼を受けなければ救われない。そのようなことはありません。この規則、この規定、このルール、このレギュレーション、この儀式、このリチュアル、そうしたものを守らなければ救われないと説くのは、ただの宗教です。もともと宗教という言葉は、ラテン語の「レリギオ」から来ていて、「レリギオ」というのは実際に「縛る」という意味があります。まさに律法主義はあなたを縛るものです。その一方で「レリギオ」には「結び付ける」という意味もあります。もし私たちがイエス・キリストと結びつくならば、私たちは恵みの中で救われるわけです。ただ、イエスから離れて人間の徳を教え、人間の課するその行いによって救われるとするならば、それはやはりただの宗教ということです。人造宗教ということです。宗教は人を縛るものです。ただ、本物の宗教もある意味人を縛るものです。ただしその縛りというのは、イエス・キリストに縛られるという、それは愛の束縛です。ですからそのイエス・キリストと結ばれる、縛られることは、まさに喜びであり、自由なのです。がんじがらめに縛られるとか、重荷を課せられる、堅苦しいとか、重苦しいということは勿論ありません。神を愛するということは神の命令を守ること、神の命令を守るとは重荷とはならないとヨハネは言いましたけれども、実際に愛の関係において縛られることは、これはむしろ喜びであり、自由であり、解放であります。夫婦関係を見れば分かります。夫婦は縛られています。でも縛られていることが却って嬉しいのです。却って喜びのわけです。そう思わない人たちは、ちょっと問題があると思います。それは愛の縛りではなくて、法の縛り。「仕方がない、もう結婚してしまったから。もう婚姻届を出してしまったから、もう縛られている。」イエスとの関係はそういうものではありません。ですからよく英語で言うのですけれども「キリスト教はレリジョン”religion”宗教ではない。キリスト教はリレーションシップ”relationship”関係である。」と。イエスと結ばれる関係。所謂一般的な宗教とは異なるということです。ただイエスと結ばれるだけ。ただイエスと関係を持つだけ。ただイエスと共に歩むだけ。それがキリスト教です。あれもしなければいけない、これもしなければいけない。そういうものは1つもありません。逆に、イエスにこんなにも愛されているからその愛に応えたい、応答したい。ですからこれも英語で言うとレスポンシビリティ”responsibility”ではなくて、責任ではなくて、レスポンス”response”であります。応答ということです。「ああしなければいけない。こうしなければいけない。」という責任ではなくて、「こうしたい。ああしたい。だってイエスは私のことをこんなにも愛して下さっているから。」レスポンス、応答であります。レリジョンではなくて、リレーションシップ。宗教ではなくて関係です。レスポンシビリティ・責任ではなくて、レスポンス・応答です。これが真のキリスト教です。これが恵みによる救い。これが信仰義認の教えであります。それ以外のものはすべて間違っています。それ以外のものはすべて律法主義、若しくはユダヤ教主義、行為義認、異端であり、カルトであるということです。

**ガラテヤ人への手紙**はこのようにも形容されています。キリスト者の信仰と自由のマグナカルタ(日本語で言う大憲章)。キリスト者の、クリスチャンの信仰と自由のマグナカルタ(大憲章)であると。**ガラテヤ 5:1**にこう書いてあります。『キリストは、自由を得させるために、私たちに解放してくださいました。ですから、あなたがたは、しっかり立って、またと奴隷のくびきを負わせられないようにしなさい。』この「奴隷のくびき」というのは、まさに律法による、宗教による縛りです。いろんなルール、いろんな規定、いろんな法律・律法に縛られることのないように。もうあなた方は解放されたのだ、自由だと言っているわけです。ですから、この**ガラテヤ人への手紙**はキリスト者の信仰と自由のマグナカルタ(大憲章)と言われるわけです。先ほど主題聖句として挙げた **2:16**も『福音の大憲章』などとも呼ばれます。

内村鑑三もこの**ガラテヤ人への手紙**についてこのように述べています。「自由の殿堂と自由の福音。これに加えて自由の生涯。特にこれを唱えるものが、使徒パウロの**ガラテヤ書**である。この書が聖書の中に保存されて、完全な自由はついに人類の所有とならざるを得ない。この書がこの世に存する間は、政府も教会も長くその圧制を続けることは出来ない。この書はルーテルが(ルーテルというのはルターのことです。)彼の鉄壁として困ったところのもの。この書があったので16世紀の宗教改革は成ったのである。そしてこの書があるので私たちの自由もまた確実である。この書を称してクリスチャンの自由の大憲章という。ああ、感謝すべきかな、**ガラテヤ書**。」と内村鑑三はこの書を絶賛しています。

その彼が言ったルーテル、ルターが、やはりこの**ガラテヤ人への手紙**を通して目が覚めて、そして彼が残した最も優れた労作と言われる『**ガラテヤ書注解書**』というものが出来たわけであります。ルターは元々はカトリックの司祭であったわけです。神学者であったわけです。行いによらなければ救われぬ。行いがなければ救いを失ってしまう。そのような中世の腐敗したローマカトリックの教えの中で、彼は行き詰まっていたわけです。非常に悩み苦しんでいたわけです。どんなに頑張っても、完璧を目指しても、心には平安がない。救われているという実感がない、確信がない。恐れていました。ありとあらゆる努力をしました。苦行もし、修行も積みました。一生懸命勉強もしました。断食もしたり、身体に文字通り傷を与えるような、鞭打つようなこともやりました。それでも全然救われている気がしない。まだ充分ではないと思ってしまう。そんな時にルターは**ローマ書**に出会って目が開かれ、救われるのです。そしてその後、**ガラテヤ書**を見て確信をします。**ローマ書**もよく『**恵みの福音書**』と言います。**ローマ書**が『**恵みの福音書**』であるならば、**ガラテヤ書**は『**恵みの書簡**』と言って良いと思います。恵みの手紙。ですから、**ローマ**と**ガラテヤ**はセットで学んだら良いと思います。実際に**ガラテヤ人への手紙**の中にも、恵みという言葉が全部で7回使われています。6章しかありませんが、必ず1章毎にひとつはあるようなものです。恵みが必ず語られている。それだけ強調されている。勿論7という数字は完全数・完了数でもあります。パウロにとって恵みがもうすべてだったわけです。信仰は恵みに始まり、恵みに終わるわけです。すべては恵みの中に置かれるものだということで、**ローマ人への手紙**と**ガラテヤ人への手紙**。これは私たちの信仰の生命線であります。信じるだけで救われる。まさにそれが恵みであって、それが**ガラテヤ人への手紙**の中心テーマであって、それが福音の生命線であって、それが福音の大憲章であって、それがまたルターが宗教改革を決心した書でもあるわけです。「もう縛られる必要はないんだ。これもしなければいけない。あれもしなければいけない。これはしてはいけない。あれはしてはいけない。」そのような束縛から自由にするもの。恵みによって目が開かれる書、それが**ガラテヤ人への手紙**であるということです。

ルターはこの**ガラテヤ人への手紙**のことをこのように言っています。「**ガラテヤ人への手紙は私のカタリーナ・フォンボラである。**」何ですか、それは。カタリーナと言ったらそれは女性の名前です。英語で言えばキャサリンです。「**ガラテヤ人への手紙は私の手紙である。その時代に私がいたとしたら結婚していたであろう。ガラテヤ人への手紙とは愛しきわが妻、カタリーナそのものだ。**」と。カタリーナ・フォンボラというのはルター夫人のことです。カタリーナ・ルターとなった女性です。このカタリーナ・フォンボラ、ルターが信仰面でも助け手としていつも傍に居て、どんな迫害にも彼女の励ましがあったので、ルターは宗教改革を断行出来、また貫徹出来たわけです。そのような妻のことを、この**ガラテヤ人への手紙**の中に見たわけです。この手紙があるから私は生きていける。この手紙があるから私は支えられる。この手紙があるから私は立ち向かえる。どんな反対があっても、カトリックに彼は歯向かったのです。命の危険もあったわけです。でも、この手紙が我が妻カタリーナそのものだ。彼女が励ましてくれる。自分の妻のように愛したのがこの**ガラテヤ人への手紙**です。聖書を自分の妻のように愛する。そのような感覚が皆さんにあるでしょうか。皆さんの多くは妻ですけれども。これは夫と置き換えてもいいと思います。聖書を自分の夫のように愛する。聖書を自分の妻のように愛する。これが私の支えです。これがなければ生きていけません。

そしてちょうどこの**ガラテヤ人への手紙**の注解を書き終えたその直後にルターは宗教改革を断行するわけです。宗教改革に火をつけた手紙、これが**ガラテヤ人への手紙**であったわけです。宗教改革の旗印、それが**ガラテヤ人への手紙**の中心テーマである信仰義認です。「**人は行いによって救われるのではない。人は恵みによって信仰を通して救われるのだ。**」と。信仰義認です。それを旗印として、ルターは宗教改革に命を捧げていくわけです。当時の中世のカトリックは、政治権力とも結び付いていましたから、絶対的だったわけです。贖宥状しよくゆうじょうという、免罪符としても皆さん知っていると思います。それを売って、そして信仰よりも金で罪が許される。実際にカトリックの信仰によれば、死んだあと天国にダイレクト行けるわけではないのです。カトリック信者は必ず天国と地上の中間にあたる煉獄というところに行かなければいけないのです。その煉獄というのは、地獄とさほど変わらないところ。地獄ほど苦しいところ。せっかくイエス・キリストを信じたのに、死んだ後すぐに直接天国に行けずに、まずは煉獄に行かなければいけない。大変なことです。そこでの苦しみを和らげるためにカトリックの人たちは生前に地上生活において良い

ことをするわけです。たくさん献金をしたり、善行を積んだり、しっかりとミサを守って、そして貧しい人たちに施したりしながら善行を積むわけです。まるで聖人のように生きるわけです。それをしなかった人たちは、煉獄でその罪を償うわけです。地獄には落ちる事はありません。それはイエス・キリストを信じたがゆえにということなのですが、でもそれ以外にもたくさん罪を犯してしまうのが私たちであります。その罪はイエス・キリストが贖って下さるのではなくて、自分の行いによって贖うと、償うというものです。それを具体的に煉獄で償うのですけれども、地上で罪をたくさん犯してしまえば犯してしまうほど煉獄で長く苦しまなければいけないわけです。でも、それは大変だからということで贖宥状・免罪符、金を出せばその苦しみはカットされる。たくさん金を出せば出すほど煉獄での時間が短くなって天国に行けるようになると。そんなことは勿論聖書に書いてありません。そのような教えに対してルターは、「**聖書にはただイエス・キリストを信じるだけで救われる。義と認められる。行いなんか必要ない。**」そのことを命がけで伝えようとしたわけです。その腐敗したカトリックを改革しようとしたわけです。別にプロテスタントという新しいグループを作ろうとしたわけではありません。何としてでもこの腐敗したカトリックを変えたかったのです、改革したかったのです。でもそれが認められずに異端とされて、プロテストする者、抗議する者。「あいつらはやたらめったら聖書を振りかざして俺たちに難癖をつけてくる。文句を垂れてくる。体制を崩そうとする反抗分子である、異端分子である。だからプロテスタントだ。」と。良い意味ではないです。そのようにして今日プロテスタントが形成されて、そして私たちはそのルターの信仰を本来は継承しなければならない者です。つまり聖書に立ち返って、行いによらない神の恵み一つによる救いです。信仰を通してもたらされる信仰義認の救い。それだけが聖書的、正統的な信仰であります。そのキリストを信じる信仰によって救われるという福音の生命線というものがこのガラテヤ人への手紙の中に美しくまた力強くまとめられているところであります。

もう一度ガラテヤ 1:6~7 を見て下さい。『**私は、キリストの恵みをもってあなたがたを召してくださったその方を、あなたがたがそんなにも急に見捨てて、ほかの福音に移って行くのに驚いています。**』ほかの福音といっても、もう一つ別に福音があるわけではありません。あなたがたをかき乱す者たちがいて、キリストの福音を変えてしまおうとしているだけです。』神様が唯一ならば、救いも唯一であります。他の救いとか、他の福音というものはないわけです。あれもこれもではなくて、これだけです。聖書のみ、信仰のみ、恵みのみです。キリストを信じる信仰によって救われる。神の恵みによって救われる。これがパウロの伝えた福音です。ところがこのガラテヤの諸教会には「イエス・キリストを信じる信仰だけは救われぬ。割礼も受けなければ救われぬ。」という他の福音なるものが入り込んできて、そして教会内をかき乱しているんだと。今日割礼にあたるものは、洗礼であったり(バプテスマです。)、**「うちの教会員にならなければ救われぬ。」**とか、この儀式を受けなければ救われぬ。これは全部他の福音です。そのような福音をもたらす者は、教会内をかき乱す者です。1:8~9 のところにも『**しかし、私たちであろうと、天の御使いであろうと、もし私たちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです。**(物凄い厳しい言葉が使われています。そのかき乱す者たちはのろわれるべき者たち。)**私たちが前に言ったように、今もう一度私は言います。もしだれかが、あなたがたの受けた福音に反することを、あなたがたに宣べ伝えているなら、その者はのろわれるべきです。**』何度も言いますと。その者はのろわれるべきです。のろわれるべきですと繰り返しています。ちょっと私たちはそんな言葉をなかなか使えないところですが、パウロは迷うことなく、ためらうことなく、**「そんな者はのろわれるべきだ。」**と。後で見ただくと、5:12 にも『**あなたがたをかき乱す者どもは、いっそのこと切り取ってしまうほうがよいのです。**』「切り取ってしまう」と訳していますが、第二版の新改訳聖書では『**いっそのこと不具になってしまうほうが**』不具というのは男性の性器を切り取るということです。割礼どころの話ではありません。おちんちんをちょん切った方がいいと言っているわけです。これは私の言葉ではないですから勘違いしないで下さい。これは聖書がそう言っているんです。神の靈感によってパウロがこう言っているんです。その者はのろわれるべきである。その者はおちんちんを切りとられるべきであると。大変なことです。それを望む人もいますけれども、そういう意味ではなくて。もう男性として生きていけないという意味です。致命的だということです。のろわれるべきである。不具にされた方がマシである。切り取ってしまうほうが良いと。パウロの感情が露あらわになっています。これは明らかに

義憤です。私たちは彼と同じような感情を持っているでしょうか。怒りっぽい人、すぐにブチ切れる人、そういうことを言っているではありません。そうではなくて、この恵みの福音を、行いの他の福音にすり替えて教会内をかき乱す。「イエス・キリストを信じるだけでは充分ではない。プラスアルファ。」そういうことを説く人たちに対してあなたはどのような感情を抱いているでしょうか。「まあ、そういう考えもありますね。それはそれぞれの自由です。聖書の解釈なんていくつあったっていいんです。十人十色。」そんなことは、パウロは言いません。「神はお一人、救いも一つ。救いはただ神の恵みによるもの。信仰を通して得られるもの。それ以外にはないんだ。それ以外のものを説く者は、のろわれるべきだ。」と。切りとられるべきだ。私たちも(そういう言葉を使わなければいけないと言っているわけではないですけれども)、怒るべきところに対してしっかりと怒るべきであるということ。どうでもいいことばかりに私たちは怒っているかもしれません。怒るべきでない時に私たちはむしろ怒ることの方が多いかもしれません。でもパウロが怒ったそのポイント、それはどこにあるのか。恵みから外れていくということがどんなに恐ろしいことなのか。行いに走ってしまうことがどんなに悲惨なもので、それが教会においてダメージをもたらすのか、パウロはよく知っていたので非常に厳しい言葉で感情を露にしてこの手紙を書いています。1:10のところに『いま私は人に取り入ろうとしているのでしょうか。(おべっかを使おうとしているのでしょうか。胡麻を播ろうとしているのでしょうか。)いや。神に、でしよ。あるいはまた、人の歓心を買おうと努めているのでしょうか。もし私がいまなお人の歓心を買おうとするようなら、私はキリストのしもべとは言えません。』人の顔色を見て、人に喜んでもらおうとか。「こんなことを言ったらこの人は傷つくに違いない。こんなことを言ったらこの人はもう二度と教会に来ないに違いない。不快に思うに違いない。感情を害するに違いない。」そんなことをパウロは一切恐れていません。彼は臆病の霊で満たされていたわけではありません。愛と力と慎みの霊によって彼は満たされていました。ですから人の顔色なんか見ていません。人の関心なんか今更買おうとしないんです。人に喜ばれようとか、人に認められよう、褒められよう、嫌われないようにしよう、ではないのです。もしあなたの中にそのような思いが少しでも潜んでいるならば、あなたはもはやキリストのしもべとは言えません。キリストのしもべは、人の顔色ではなくて、キリストの顔色を見なければいけません。イエス・キリストが怒っているのです。だからパウロも怒っているのです。イエス・キリストが悲しんでいるのです。だからパウロも悲しんでいるのです。イエス・キリストが怒っているのに、私たちが何食わぬ顔をしてへらへらしているならば、もはやキリストのしもべとは言えません。勿論イエス・キリストが怒っていないのに怒ってしまうのは、これはもう論外であります。それはモーセが犯した重大なミスでもありました。でもイエス・キリストが怒っている時、宮清めをなさろうとしている時、イエス・キリストが、普段は柔和でへりくだって心優しい方ですけれども、でも怒る場面があったということを私たちは福音書から教えられています。パウロもただ気が短くて怒ったのではなくて、イエス・キリストが怒るべきところでパウロも怒ったということです。人の顔色など全く見ていません。この後見て頂くと、パウロはエルサレム教会の重鎮の1人、使徒の頭でもあったペテロに対して、面と向かって公然と彼の一貫性のないところにおいて激しく反対し、厳しく批判しております。年上の、先輩の重鎮に対して臆面もなく、(本当にその時には周りも引いてしまったと思います。びっくりしたと思います。でも、)そんな人のことなど全く気に留めずにパウロは言うべきことを言った。間違いは間違いである。ちゃんと間違いを正すということ。勿論兄弟が罪に陥ったならば柔和な心で正してあげなさいと、これもパウロの言葉であります。また真理を語る時には愛をもって語りなさい。これもパウロの言葉であります。ですから勿論いつでも怒り口調で感情を露にしながらか真理を語りなさいとか、人を正しなさいと言っているわけではありません。でも時には怒っても良いわけです。怒ってはいけないとは聖書には書いてありません。ただ、怒ったままではいけないと書いてあるだけで、怒るべきなんです。いつも冷静沈着で落ち着いていなければいけないと言っているわけではありません。激怒しなければいけない時は激怒しなければいけないのです。ですから是非そのことも皆さんに取り違えないようにして頂いて、ほとんど普段は柔和で構いません。イエス・キリストを見れば分かります。やたらめったら怒っていたわけではありません。むしろ罪人たちに対してどれほど憐れみ深いお方だったのか。ペテロに対しても、3度も公の場でイエスを否定したにもかかわらず、その眼差しはどれほど慈しみ深いものだったのか、皆さんは知っているはずです。ですから、いつも怒っているわけではないです。でも、時には怒らなければいけない時があるということです。

宮清めをされたイエス・キリストに声をかけることが出来た者は1人もいなかったのです。神殿警察も過ぎ越しの祭りの時にはピリピリしていたわけです。でも、ローマ兵士たちも警護にあたっている、誰1人としてイエスを止めることは出来なかったのです。祭司たちも止められない。群衆も止められない。そのような怒りを発するべき時があるということを感じて頂きたいと思います。

そしてテキストの**ガラテヤ 1:1**を見て頂きたいと思います。『**使徒となったパウロ——私が使徒となったのは、人間から出たことでなく、また人間の手を通したことでなく、イエス・キリストと、キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神によったのです。**——』実際に原文でこの箇所を直訳してみるとこうなります。原文の語順を皆さんに今お伝えしますので、どういう聞こえになっているのか聞いて頂きたいと思います。『**パウロ、使徒。人々によるのではない。人を通してでもない。イエス・キリストと彼を死者の中からよみがえらせた父なる神による。**』これが逐語訳というものです。一番初めに来るは言葉パウロ。その次に来る言葉が使徒です。それは人々によるのではない。否定しています。人を通してでもないと、また否定しています。いきなり冒頭から二重否定で始まっているのです。普通の手紙では考えられないような書き出しです。言うなればいきなり喧嘩腰だということです。でも、なぜそんな喧嘩腰になるのかはもうお分かりだと思います。人々によるのではない。人を通してでもない。イエス・キリストと父なる神による。そのようにして遣わされたのが私であると。使徒というのは遣わされた者という意味です。でも、割礼派の人たち、ユダヤ教主義者の人たち、パウロとは異なる他の福音、「イエスを信じるだけでは救われない。これもしなければいけない。割礼を受けなければ救われない。」と説くその偽教師たち、反対者たち、かき乱す者たちは、パウロの使徒としての権威を否定したわけです。「パウロはキリストの使徒なんかではない。だから彼の言うことなんて真に受けなくていい。彼の教えには何の権威もない。だって彼はキリストの使徒じゃないから。」そのようにパウロの使徒職の権威を疑う者たちや否定する者たちが多くいたわけです。**コリント人への手紙第二**も実はそのような背景を持っています。パウロの使徒職としての権威を疑ったり否定する者たちが多くいたので、コリントの教会も大分かき乱されていたのです。そんな彼らに対して宛てたのが**コリント人への手紙第二**であったわけです。それと同じような背景を持っているのがこの**ガラテヤ人への手紙**であります。パウロの使徒職に対するチャレンジ、挑戦状です。それに対してパウロはいきなり『**パウロ、使徒**』ここからスタートしているわけです。誰にも文句言わせないと。『**パウロ、使徒。人々によるのではない。(否定。)人を通してでもない。(否定。)イエス・キリストと彼を死者の中からよみがえらせた父なる神による。**』と。実際に使徒職というのは**使徒の働き 1:21~22**にこのように定義されています。使徒としての資格です。キリストの使徒として呼ばれるにふさわしい資格者とはどういうものか。ちょうど背景にあるのは、十二使徒の1人イスカリオテのユダが首をくくって自殺をして穴が開いてしまったわけです。その穴埋めとして**21節**にまずは使徒職とはどういうものかが確認されて、この資格を有する者がユダの後釜となるべきである。そこに書かれていることは『**21 主イエスが私たちといっしょに生活された間、22 すなわち、ヨハネのバプテスマから始まって、私たちが離れて天に上げられた日までの間、いつも私たちと行動をともにした者の中から、だれかひとりが、私たちとともにイエスの復活の証人とならなければなりません。**』イエス・キリストと共にいた者たち、復活の証人。それが第一条件、それが絶対条件、大前提だったわけです。その中からバルサバと呼ばれる別名ユストと、ヨセフと呼ばれるマッテヤ、その二人が絞られて、そしてくじ引きによってマッテヤが選ばれたという経緯があるわけです。それをもってパウロのことを見てみると、パウロはイエスと一緒にいたわけではないわけです。逆にパウロは教会を迫害していた者です。**使徒の働き 9章**に実際にパウロがユダヤ教の異端としてキリスト教という新しい一派が起こってきたことにむしろ彼はこれを撲滅すべきであると、キリスト教反対運動の急先鋒となって、大祭司の権威を帯びて、彼はクリスチャンたちを男も女も子供も見境なく捕らえては弾圧して、そしてあのステパノの殉教にまでも関わった人物です。ですから、パウロには使徒職としての権威はない。彼は資格外であると。そのようにしてパウロの使徒職は疑われたわけです。しかし実際にパウロは復活のキリストに出会って、そして目からウロコの体験をして、イエス・キリストから直接使徒として任命されたのであります。**使徒の働き 9章**にそのことが書いてあります。ですからこれは『**人々によるのではない。**』会議してくじ引きで決めたのではない。教団教派が任命したものではない。『**人を通してでもない。**』エルサレム教会の重鎮である

ペテロやヨハネやヤコブによって任命されたわけではない。そうではなくて私は復活のイエス・キリストから直接任命された。油を注がれて召しを受けた者である。そして、そのイエスを死者の中からよみがえらせた父なる神によって私は召されたのだと。ですから、パウロの使徒職を疑う者たち、使徒的権威を否定する者たちに対して、もういきなり初っ端からパウロは自らの使徒的権威を主張して、そして完全に彼らの疑念というものを切り捨てているわけであり、ここで皆さんにも考えて頂きたいこと。このことを通して皆さんにも適用して頂きたいことがあります。私たちが神によって遣わされるものとなります。その遣わされる場所、その権威というものはどこから来ているのかということ。バプテスマのヨハネもヨルダン川でバプテスマを受け始めてから、ユダヤ教の当局者たちが来ては「あなたは何の権威でそのようなことをしているのですか。」またイエス・キリストが宮清めをされた時もユダヤ教の当局者は「あなたは何の権威でそのようなことをするのですか。私たちにしるしを見せて下さい。証拠を見せて下さい。」必ずそのようなチャレンジがあろうかと思えます。でも、私たちは皆人々によるのではなく、人を通してではなく、イエス・キリストと父なる神、そして今は聖霊なる神も私たちに与えられています。三位一体の神によって私たちは救われ、召されて、神の御心を行うべく遣わされている者であります。〇〇教団、××教会に属すとか、〇〇の神学校を卒業したとか、××の教師の検定試験に合格して牧師の資格を持ったとか、セミナーを修了したとか、そういうことは一切実際のところは必要ないものであります。神によって遣わされる者の権威。それは人によらないもの、人々によらないものだけということです。そもそも私たちが救われたのは、これは人によって救われたのではないわけです。神によって救われたわけ。神によって救われた者は、神と共に生きます。神によって救われたのに、人によって遣わされるということはありません。ですから、過去のいろいろな華々しい経歴であったり、学歴であったり、肩書き、そういうものに一切捉われてはなりませんし、そのようなものに頼りを置いてはいけませんし、そのようなものがないからといって否定したり、拒否したりということは出来ないわけです。その人の過去がどうであれ、パウロのことを考えて下さい。その人の能力や実績がどうであれ、パウロはかつてパリサイ人、律法学者、バリバリのユダヤ主義者だったわけです。そんなことは全く問われず、関係ないということです。人間の努力や行為によって救われるか救われないか、そんなことは左右されないのと同じように、イエス・キリストにお仕えして、イエス・キリストの福音を宣べ伝えるにあたって、まったくそれは行いが含まれない、差し挟まれない。すべては恵みによるものです。ですからパウロは、自分の使徒職はやはり恵みによるものだと、ローマ 1 章の書き出しではそのように明言しています。ただ、自称使徒ではないのです。「私は恵みによって救われ、この恵みによって今使徒とされた。神の恵みによって今の私になりました。」と、コリント人への手紙の中でもパウロはそう言っています。すべては恵みです。「月足らずのこんな私にも神の恵みが与えられた。罪人の頭であるこんな私にも神の恵みが与えられた。自分の経歴など誇れない、威張れない。」このガラテヤの最後のところでは、「イエス・キリストの十字架以外には誇りとするものはあってはならないし、そんなものは私にはないんだ。」と、ガラテヤ 6 章のところでもパウロはそう告白しています。「ですから強いて言うならば、私の使徒的権威は神の恵みである。徹頭徹尾神の恵みである。」ですから最初の書き出しでは喧嘩腰で怒り口調のように思うかもしれませんが、でもそこで強調したかったのは、これは恵みである。偽教師たちが強調したかったのは行いです。「私たちは生粋のユダヤ人。私たちはエルサレムの出。私たちは律法を学んできた者。無学な者ではない。私たちは、ペテロやヨハネやヤコブと繋がりのある者たち。コネクションがある者たち。」そういうことを強調する人たちに対して、パウロは「そんなものは無用である。不要である。そんなものは何の役にも立たない。」いきなり冒頭からそのことを強調しているわけです。この教会も確かに独立教会の単立教会です。教団とか教派には属していません。所謂無教派の教会です。勿論私はカルバリー・チャペルの出身なので、カルバリー・チャペルの聖書観だとか、信仰観、ミニストリーの哲学、そうしたところは継承していますし、それは聖書的だと信じて、それを実践しようとしています。でもカルバリー・チャペルという教会は、それは教派とか教団ではありません。単立です。大きなグループで、枝教会のような形で関係教会というのは沢山あります。世界最大のグループとなっているのはこれは事実でありますけれども、それは教団ではないのです。人々によるのではない。大きな教団教派によるのではない。カルバリー・チャペルによるのではない。人によるのではない。私の牧師はチャック・スミスですけれども、チャッ

ク・スミスによるのではない。私たちはイエス・キリストと父なる神に、三位一体の神によって立つ教会であり、その他のものに私たちは特別重きを置きません。どこの教団にも属さない。牧師が高い学歴を持たない。そんな教会は、と思うかもしれませんが。この教会の頭は、イエス・キリストであります。だから安心して下さい。私が頭だったら頼りない教会ですけれども、でもこの教会の頭はイエス・キリストであります。この教会は、イエス・キリストの教会であります。私はそのイエス・キリストの教会に遣わされた者です。私には何の資格もありません。敢えて言うならば、恵みを受けただけであります。このことがはっきりしていないとガラテヤの教会のように、人によって若しくは人々によって左右されてしまうことになります。「あの牧師はこう言っている。この先生はこう言っている。この本にはこう書いてある。」そうした教えの風に吹き回されてしまうことになります。「牧師の私がこう言ったから。カズがこう言ったから。」ではないんです。「聖書にはこう書いてあるから。イエス・キリストはこう言われているから。イエス・キリストだったらこうなるから。イエスだったら何とおっしゃるだろうか。」それがこの教会の1人1人が常に意識しなければならないポイントであります。常に吟味して頂きたいと思えます。どんな有名な牧師であろうと、伝道者であろうと、宣教師であろうと、経験豊かで信仰歴も長いそのような立派なクリスチャンと見られている人であろうと、やはり彼らはただの人です。何百年という伝統のある教団教派でも、それはただの人の集団であります。宗教組織であります。いくらキリストの教会、神の教会ということの名乗ったところで、イエス・キリストを頭としていなければすべての教会はこのガラテヤの教会のようにかき乱されてしまう。そして間違った教えに影響を受けてしまう。気が付いたら恵みから外れて「行いがなければ救われない。」行為義認が説かれるような教会になってしまいます。

ガラテヤ人への手紙の注解を書いたウィリアム・バークレーという人の『攻撃を受けたパウロ』という、その見出しで書かれている内容も皆さんに少し分かちたいと思えます。『攻撃を受けたパウロ』使徒職の真正について。それが本物か偽物か。権威が本当にあるか無いかな。その点において攻撃を受けたパウロ。そのことについてウィリアム・バークレーという人は、このように注解をしています。「もしその攻撃が成功を収めていたとすれば、キリスト教はユダヤ教の一派に留まり、さらにユダヤ人のための、ユダヤ人のためだけのものになっていたかもしれない。またキリスト教は恵みの教えとなる代わりに、割礼と律法の遵守を頼みとするものになっていたかもしれない。もしパウロの敵対者たちの思い通りになっていたとすれば、福音はユダヤ人のために保存され、私たちは(すなわち異邦人の私たちは)キリストの愛を知る機会を全く持ってなかったかもしれない。(ウィリアム・バークレーはそれを持ってとても不思議な気持ちになると言っています。)そうです。パウロの使徒職がもし攻撃されなかったら、(攻撃を受けるということとはあまり喜ばしいことではないように私たちは思います。)もしパウロの使徒職が攻撃されることがなければ、この手紙は書かれなかったということも覚えて頂きたいと思えます。この手紙が書かれなかったら、ひょっとしたら宗教改革もなく、プロテスタントもなかったかもしれない。」そういったことを思い巡らすと確かにウィリアム・バークレーのように不思議な思いになるかもしれません。この攻撃を受けるということも、非難を受ける、批判をされるということもまた神は大きな計画の中で用いられたということです。1世紀の時代の話が、いつの間にか16世紀の宗教改革に於いて力強く用いられるということ、神は見越していたのでパウロの手を使って靈感によってこの手紙を書いたということです。それは21世紀の今日の私たちにおいても必要な手紙となっているということです。

そして1節のところでもう一つ指摘しておきたいことがあります。終わりのところに『イエス・キリストと、キリストを死者の中からよみがえらせた父なる神によった』とあります。イエス・キリストをよみがえらせたのは父なる神であるとパウロは言っています。その一方でヨハネの福音書2:19『イエスは彼らに答えて言われた。「この神殿をこわしてみなさい。わたしは、三日でそれを建てよう。』」21節のところでは『しかし、イエスはご自分のからだの神殿のことを言われたのである。』22節には『それで、イエスが死人の中からよみがえられたとき、弟子たちは、イエスがこのように言われたことを思い起こして、聖書とイエスが言われたことばとを信じた。』ここではイエスが自らよみがえるということを主張・宣言されています。ガラテヤ1:1ではイエスを死者の中からよみがえらせたのは父なる神だとパウロは言っていますが、ヨハネ2:19においてはイエス・キリストご自身が自らをよみがえらせるということを行っています。自分でよみがえると言っているわけです。

ローマ8:11を今度は見て下さい。『もしイエスを死者の中からよみがえらせた方の御霊が、あなたがたのうちに住んでおられるなら、キリスト・イエスを死者の中からよみがえらせた方は、あなたがたのうちに住んでおられる御霊によって、あなたがたの死ぬべきからだをも生かしてください。』ローマ8:11では、御霊が、聖霊がイエスをよみがえらせ、とあります。一体何が本当なのか、事実なのかということです。全部聖書に書かれているので全部事実です。イエスを死者の中からよみがえらせたのは父なる神です。そしてイエスが死者の中からよみがえったのは、イエス自身の力にもよるものです。でもそれはやはり聖霊の力にもよるものだと言うことで、三位一体の神がイエスを死者の中からよみがえらせたというのが事実であります。三位一体の神を信じない人たちにもこのことを告げて頂きたいと思えます。「ただ神はおひとり、エホバだけだ。」という人たちに、是非このことを伝えて頂きたいと思えます。聖書の神は、三位一体の神です。勿論神が3人いるではありません。3にして1つのお方。3位格というふうに言います。英語ではパーソン”person”というふうにも表現出来ます。人間的に言うならば、それは人格と言って良いかもしれませんが、でも、ひとりなのです。3重人格みたいに思うかもしれませんが、不思議なお方。人間の理性・知性ではとても計り知れない、把握出来ない、収め切れない、そのようなお方です。私たちが分からないことなど世の中には五万とありますけれども、三位一体の神その方も私たちのちっぽけな脳みそではとても理解し尽くせない方だということです。ですから当然と言えば当然です。三位一体の概念が理解出来ないのは、これは神が神であるが故にあります。

そして2節の方に今度は移って頂きたいと思えます。『および私とともにいるすべての兄弟たちから、ガラテヤの諸教会へ。』とあります。ガラテヤ地方の各町の諸教会。ピンディヤのアンテオケとか、イコニウム、ルステラ、デルベといったような町がガラテヤ地方にあります。そうしたところをパウロは宣教して回って、各地に教会を設置したわけでありました。それらの諸教会にこの手紙が1通宛てられて、回覧板のようにして回されたわけでした。この手紙は神の靈感によるものですから、2000年の時空を経て今日の私たちにも回覧板として回ってきたわけでありました。

そして3節。『どうか、私たちの父なる神と主イエス・キリストから、恵みと平安があなたがたの上にありますように。』これはパウロの手紙の中では、もう定型句となっています。挨拶文の必ず決まり文句となっているところです。父なる神と主イエス・キリストが同列になっているところ。1節にも繰り返されていました。同等のお方、同一のお方。父と子が一緒に並んでいるというのは、これはまさに三位一体の神を意識しているということです。でも、どうして聖霊が出てこないのかと疑問に思うかもしれませんが、聖霊というお方は、聖霊様は、あまり表に出たくない方です。なぜならば聖霊はいつもイエス・キリストの栄光を現すからです。自分に栄光を帰すことを嫌う方です。イエス・キリストは父なる神の栄光を現します。父もイエスの栄光を現します。でも、聖霊の栄光を現すものは他にありません。聖霊は常に陰にまわって、イエスの栄光を表します。ですから聖霊という名前がここに出てこないのは、これは聖霊が自分で名前を伏せているわけです。ヨハネの福音書もヨハネという記者は自分の名前を伏せています。またヘブル人への手紙の記者も自分の名前を伏せています。そういうことはよくあることです。敢えて自分の名前が目立たないように、前面に出ないように、自分に栄光が帰せられないように。聖霊もそのようにして原著者ですから、いつも控えめで、すべて自分の書くことはイエス・キリストを褒め称えること。

そして『恵みと平安があなたがたの上にありますように。』と、この恵みのところをパウロはいつも強調しているわけでありました。パウロのハートがここに込められています。恵みという言葉は、もう何度も皆さんは定義を聞いているので、もうしっかりそれは皆さんの中では定着していると思えます。分不相応な者が受ける過分な親切です。分不相応だということを常に覚えて欲しいと思えます。「私は何も受けるに値しない者である。全く相応しくない者。当然受けるべきものなど私には何もないんだ。」と。「これだけ頑張っているんですから見返りを。毎日聖書を読んでいるんですからちょっとは祈りに応えて下さい。こんなに足繁くバイブル・スタディーに通っているのに、礼拝も欠かさず通っているのですから、このぐらいの言うことを聞いて下さいよ。」まるでお百度参りしているから、まるでお布施をしているから聞いて下さいよ、と言っているようなものであります。それは恵みではなくて行いです。恵みというのはもうまったく私たちの行いなど含まれない、完全度外視したものです。何をしようと神からよくしてもらえる、祝福を頂ける。

そんなことは私たちには到底出来ないということです。私たちは自分の罪を全て償うことは出来ません。清算することなど出来ないんです。自分で自分を救うことも出来ないんです。神様から何かよくしてもらい、祈りに応えてもらう、祝福を受ける、それを引き出すような行いを私たちは全く出来ない。むしろ私たちの行いは、私たちの義というのは、神の目には不潔な着物のようだといザヤ 64 章に書いてあります。これも直訳すると「月経で汚れたものである。」女性の生理で汚れたナプキン・タンポンだと言っているわけです。これも私の言葉ではないですから、強烈に聞こえるかもしれませんがこれは聖霊の靈感によって書かれた言葉です。人間の行いなど汚い忌み嫌われる気持ちの悪いものだと言っているわけです。不潔なものだと。なのに私たちは「こんなに頑張っているんですから認めて下さい。」そうではないですね。すべては恵みです。分不相応な者に与えられる過分な親切であります。受けるに値しない者に一方的に与えられる神の祝福です。それは無条件に、無代価に与えられるものです。ですから、信仰プラス割礼なんていうことは全くあり得ないということです。救いはただ恵みによるものです。それを受け取ることが信仰です。差し出されたプレゼントを「相応しくないですけど、こんな私も貰っていいのですか。」それが信仰です。神の賜物、プレゼントが目の前に用意された時に、私たちは時に躊躇します。「だって私は良い子ではないですから。良い子ではないのにこんなプレゼントを貰っていいのですか。とても貰えません。もっと良い子になってからもらいたいと思います。もっと頑張ってから、生活を整えてから、正してから、それからキリスト教に入信したいと思いますとか。もっと聖書を読んでから、もっと勉強してから。」それは恵みではありません。恵みは相応しくないことを認めた上で「私はどうしようもない罪人です。神様から何も良くして頂けるに値しない。救われるに値しない。愛されるに値しない。そんな者です。でもあなたが一方的にこの永遠の命という、イエス・キリストという賜物を私に与えて下さるならば、私は有り難く頂戴します。下さい。」それが信仰です。恵みによって私たちは救われて、信仰を通して受け取るだけです。

その結果どうなるか。必ずあなたの心には平安がやって来ます。恵みと平安、この順序は大事です。平安が先に来るわけではありません。平安があるから信じますということはないのです。信じなければ、平安が来ません。まず神の恵みを経験しない限り、あなたのうちに平安が経験されるということは絶対にありません。この順序が逆転することは絶対にないのです。先に恵みが来ます。その後に平安が来ます。

ルターはガラテヤ書の講解書の中でこのようなコメントをしています。「恵みは罪の赦しを与え、平安は静かな喜ばしい良心を与える。さらに罪が赦されていないならば平安はもらえない。律法は罪の故に良心を告発し、恐れさせる。良心を感じる罪は、巡礼や徹夜の祈りや労働や熱心な努力や断食など、要するに如何なる行いによっても取り除かれない。否むしろそれらによって増大されるのである。だから我々がより勞し罪を取り除こうと努力すればするほど、我々の状態はよりひどくなる。罪は恵みのみによって取り除かれるのであって、他の何によるのでもない。このことは大いに学ばれるべきである。」このことは大いに学ばれるべきだと、今も私もルターに共鳴して皆さんに声を大にして伝えておきたいと思います。恵みは強調し過ぎるということはないと、かねてから皆さんにはお伝えしております。宗教生活を送るようになってしまうと、必ず疲れます。必ず行き詰まります。頑張って頑張って、努力して努力して、アップアップになって、最後には燃え尽きてしまいます。バーンアウトしてしまいます。頑張れば頑張るほどです。皮肉なものです。熱心に教会に通えば通うほど、それが罪の帳消しという目的であるならば、罪の相殺という目的であるならば、必ず疲れます。罪悪感があるから、教会でたくさん奉仕をして、教会にたくさん献金して、そうすれば少しはこの悩みから、この罪悪感に苛まれるこの状態から自分は解放されるに違いない。でも、それをすればするほど、疲れて空しくなって最後は行き詰まってしまいます。罪は恵みによってのみ取り除かれるということです。ですから是非今行いに走ろうとしている人たちがこの中にあるならば、その行いをやめて下さい。行いに走っている限りは、行いは恵みの反対語ですから、いつまでも恵みを体験することが出来ません。あなたの行いが恵みを阻害するのです。行いが邪魔をして、信仰という受け取り手を、あなたの行いが隠してしまっているのです。あなたの行いが恵みを受け損なうようにしてしまっているということです。そのことをもう一度皆さん、吟味して頂きたいと思います。勿論私たちは恵みによって救われれば、その恵みに溢れて、私たちのうちにはあらかじめ良い行いというものも備

えられていますから、それは自由に喜びをもって楽しく続けられるものとなります。でも、歯をくいしばりながら、嫌々ながら渋々「これをしなければいけない。これをしなかったらどう思われるか。」プレッシャーを感じながら、または人に自分を良く見せようという思いからやっているならば、必ずそれはあなたを恵みから外すものですから、却ってあなたは惨めになります。しっかり恵みを学んで頂きたいと思います。私たちの永遠のテーマ、それが恵みです。一番学びにくいものと言っていいと思います。なぜならば私たちのうちには、もう染み付いたものがあるのです。凝り固まったものがあるのです。特に日本人はそうです。日本人は努力することが大好きです。努力もしないで、なんていうものは許されないと。でも恵みというのは正にその許されないと私たちが感じてしまうところです。全く新しい概念です。努力しなくてもいいという。それは怠けなさいという意味ではありません。何をしても許されるという意味ではなくて、完全に神に信頼しきることです。自分を信じるのではないのです。神を信じるのです。自分の行いではないのです。キリストの行いです。自分ではなくて、キリストがなされたこと。「完了した。」とおっしゃいました。イエスのなされたことはすべて律法にかなったことです。イエスは律法を廃棄するためではなくて、成就するために来たわけです。イエスの行いこそパーフェクトです。私たちの行いはどうでしょうか。イエスと比べてどうでしょうか。頼りになるものでしょうか。いろんなことは出来ます、出来るように思います。でも実際にはイエスがおっしゃるように「わたしを離れてはあなた方は何もできない。」何も出来ないのが本当のところ。出来ているように思っているだけで、感じているだけで、本当は何も出来ていないのです。神の前には何一つ出来ていない。忌み嫌われることしかやっていない。まったく不完全な者です。でもイエスがなされたことは完全であります。完璧です。ですから私たちはこの方に依頼するのです。自分の行いによるのではなく、イエスの行いによる。それが私たちの信仰義認の姿勢であります。

そして4節。『**4**キリストは、今の悪の世界から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになりました。私たちの神であり父である方のみこころによったのです。**5**どうか、この神に栄光がとこしえにありますように。アーメン。』恵みのうちにあれば必ず最後は自分ではなくて、神に栄光が帰せられます。自分が恵みのうちにあるかどうか、簡単に吟味することが出来ます。栄光はどこに向かっているのか、誰に帰せられるのか。もし栄光が人間に帰せられるならば、あなた自身に帰せられるならば、それはもはや恵みによって生きているものではありません。恵みによって行動しているものではありません。それは自分の行いによっているということです。自分を信じているということでもあります。ですから、簡単に私たちは自分が恵みの中にあるかどうかは吟味出来るということを知って下さい。この箇所の注解を明石清正さんが非常によくまとめてくれています。とても簡潔にまとめているので、敢えてそれを皆さんに抜粋して紹介させて頂きたいと思います。この**4節5節**の明石清正さんの注解によるとこう書いてあります。これはもう恵みの中身そのものと。恵みのパッケージがここにまとまっているのだというところで語っています。

**キリストは、今の悪の世界から私たちを救い出そうとして、私たちの罪のためにご自身をお捨てになりました。私たちの神であり父である方のみこころによったのです。どうか、この神に栄光がとこしえにありますように。アーメン。**

まず、父なる神と主なるイエス・キリストからの恵みとは、初めに、それがキリストご自身のみわざである、ということです。私たちが神のために行なったことではなく、神がキリストにおいて行なわれたことにすべてが基づいています。ここが、私たちが聖書理解、また信仰生活で知らなければいけない死活的なことであります。私たちは、自分たちの行ないによって報酬を得るという行動パターンがもっとも自然です。因果関係がはっきりしているからです。そこで、私たちは、自分たちがしなければならないことが書かれてある聖書箇所に目が留まります。しかし聖書を客観的に読みますと、実は神が私たちのためにしてくださったことのほうがたくさん書かれております。「初めに、神が天と地を創造した。」という冒頭のことばもそうです。ですから、私たちの課題は、自分たちではなく、キリストが行なわれたことに目を留めることです。

次に、「**キリストは今の悪の世界から私たちを救い出そうとして**」と書いてあります。これは、神の恵みの目的です。何のためにキリストが恵みを注いでくださったのか。これは、私たちが今の悪い世界から救い出されるためです。神

の恵みの話題についてクリスチャンの間で語られるとき、人々は、それでは何の行ないもしなくてもよいのか。今のままでOK、何の問題もありません、というような物言いを聞きますが、これは異端です。神の恵みを知ることによって、私たちは罪から離れ、罪に打ち勝ち、ついにはからだの贖いによって、罪そのものをなくしてしまうのです。罪の中に生きるのではなく、罪に対して死に、キリストに対して生きることが出来ます。

そして、「**私たちの罪のために**」とあります。これは恵みの理由です。なぜ神の恵みが私たちの上に注がれたか、それは、私たちが罪を犯したからです。「恵み」という言葉はいろいろな意味で使われますが、例えば、良い天気にも恵まれたとか言います。しかし、聖書における恵みは、罪を犯したことに関わります。罪を犯したのにも関わらず、死ではなく永遠のいのちを持つところに現われます。罪を犯せば、その報いは死です。しかし、神は、その罪によって永遠のいのちをもたらすところのみわざを行なってくださいましたのです。そして、「**ご自分をお捨てになりました**」とあります。これは恵みの手段です。どのようにして、罪によって人に永遠のいのちをもたらすのか。罪によれば死ではないか。なのはどうして？ということにあります。それはキリストが身代わりに私たちの罪に対して死んでくださったからです。キリストが私たちの罪のために死なれ、私たちはキリストの義のゆえに生きているのです。交換をしたわけですから。キリストが私たちにご自分の義を手渡し、私たちがキリストに自分たちの罪を手渡しました。キリストが死に、私たちが生きたのです。これが神の恵みが働いた方法です。

そして、「**私たちの神であり父である方のみことよ**」とありますが、これは、恵みの計画です。これらの恵みのわざをキリストが行なわれたのは、前もって父なる神がお定めになったことでした。ユダヤ人の指導者たちの陰謀によって、キリストは死に渡されたのですが、実は、神は天地が創造される前から、このことを永遠の贖いのみわざとしてお定めになっていました。そして最後に、「**どうか、この神に栄光がとこしえにありますように。アーメン**」とあります。これは恵みの目標です。恵みが注がれたのは、人にではなく、神ご自身に栄光が帰されるようになるためです。もし私たちの功績によって、何かを成し遂げたのであれば、その栄光は私たちに帰されることになります。証しと称するこのような自慢話が、キリスト教会の中でまかりとおっています。これだけの祈りをしたから、聖霊のバプテスマを受けました。教会の人数がふえました。あの人は、こんなにささげています、など、人の功績がたたえられているのです。しかし、それは恵みではありません。神は、敢えて称賛を受けるに値しない者、いや、罰を受けるに値する者を敢えて引き上げ、そして義の冠をかぶせるようにして下さいます。それによって、だれにも栄光が帰せられず、ご自身のみがほめたたえられるように仕向けられたのです。

以上、少し長い引用になりましたけれども、この**ガラテヤ 1:4~5** のわずかな 2 節の中に神の福音のパッケージ、恵みの内容がまとめられているという指摘であります。恵みの理由とか、手段とか、恵みの計画とか、目標。この短い**ガラテヤ 1:4~5** の中にすべてまとまっていますから、皆さんも後でじっくり読みながら恵みに浸りつつ、恵みがどのようなものなのか、どのような働きをするのか。しっかりと、大いに、ルターが言うように学んで頂きたいと思えます。

今日はさわりの部分だけなので、ここで **5 節** 止まりにしたいと思えます。次回からは **6 節** 以降、実際にパウロは使徒的権威をチャレンジされて攻撃を受けたということが背景となってこの手紙が書かれていますから、それに対してパウロが敢然と立ち向かっていきます。その攻撃を受けたパウロの応答の手紙がこの**ガラテヤ人への手紙**ですけれども、それが同時に恵みの手紙となっているということが非常に不思議でなりません。攻撃を受けたのに、それが恵みとなってしまふ。これが神の御業であります。皆さんの中にもいろんな攻撃を受けている者がこの中にあるかもしれません。いろんな反対を受けている人たち「それでもクリスチャンか。」クリスチャンとしての権威というか、本物のクリスチャンかどうかということを実際に問われるようなことまでチャレンジされることもあるかもしれません。「それでも牧師か。それでもクリスチャンか。何年も何十年も教会に通っているくせに。」とか、いろんなことを皆さんもチャレンジされるかもしれません。でも、その攻撃の応答に対して神の恵みが現れるということも是非知って頂きたいと思えます。そのような御業をなすことが出来るのは、これは人ではなく、神しかありません。まさに神業であります。そんなパウロの手紙を通して驚くべき神の恵み。これがどんなに豊かであるのか。その恵みはどのように働いて、人々がまた

もう一度福音の真理に立ち返ることが出来るということも見ることになりますので、是非また次回以降楽しみにして頂きながら、もうテーマはたくさんないということです。もう恵み一言。または別の言い方をすれば、信仰義認ということ。ローマの手紙と共にこの**ガラテヤの手紙**、パウロの性格であったり、パウロの神学というものを色濃く表したものの、最もパウロらしい手紙。とりわけパウロの感情の部分がよくこの**ガラテヤ人の手紙**の中に現れています。ですからパウロの人物像に迫るのにも非常に役立つ手紙でもあります。

最後にお祈りを持って閉じたいと思いますけれども、是非今日の内容を持ってまたフレッシュなスタートを切って頂きたいと思います。もしそれまでの信仰の歩みが、教会生活が、自分の行いによるものであったとするならば、それは古い歩みです。古い性質による古い生活そのものです。イエス・キリストを知る前の私たちは、まさに行いによって生きてきたわけです。でも、いつの間にかクリスチャンになって恵みを知ったはずなのに、また行いの生活、古い生活に引き込まれているということもあるわけです。ガラテヤのクリスチャンたちのように、私たちも惑わされることがあるわけです。引きずりこまれてしまうこともあるわけです。でも、もう一度神様はあなたにチャンスを与えておられます。もう一度恵みに立ち返るように。そしてもう一度新しいフレッシュな恵みによる救い。イエス・キリストは恵みとまことに満ちておられる方です。恵みの上にさらに恵みが増加する、その生活を送りたいと願うならば、もう一度イエス・キリストに立ち返って、そしてイエス・キリストがなされたこと。自分のなしてきたことではないです。自分の今やっていることではないです。イエス・キリストがなされたこと、その完了された御業、そして今も現在イエス・キリストがなし続けてくださっていること。イエスがまことのぶどうの木です。私たちはただ何もしないでこの方に繋がるだけです。繋がるだけで、言わば勝手に実が結ばれていくわけです。豊かな実を結びたいければ、豊かなクリスチャン生活、教会生活を送りたいければ、もう一度恵みの中にとどまって、しっかりイエスと繋がって、宗教ではなくてイエスとの関係です。そしてこの恵みがあなたにどんな素晴らしい実をもたらすのか、豊かさをもたらすのか。是非ワクワクしながら、期待をしながら、また身を委ねて預けて頂きたいと思います。そのことを共に祈ってこの学びを最後閉じたいと思います。